



教皇様の聲

4

252号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 2001

希望を抱いて新しい千年期へ向かおう

〔日曜日、お告げの祈りの前に行われた教皇様のお話。〕

1 兄弟姉妹の皆さん、「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい。」（ルカ5・4）ペトロとその仲間たちが夜通し苦勞して働き何もとれなかった後、キリストがペトロに向かって言われた言葉がこれです。これは日曜日の典礼の福音の中で読まれました。ペトロの舟から群衆に向かって説教した後、イエスは次のようにおっしゃいました。「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい。」（ルカ5・4）ペトロや他の使徒たちはキリストに信頼し、網を投げてたくさんの魚を得ました。（ルカ5・5～6参照）

2 「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい。」この主の招きは鍵となる言葉で、使徒書簡「新千年期の初めに」のモットーでもあります。皆さんも覚えていらっしゃるでしょうが、この使徒書簡はご公現の祝日、大聖年閉会式の間に私がサインしたものです。

全教会にキリストのこの言葉を繰り返すことは、ペトロの後継者としての私の義務だと感じています。キリストは「きのうも今日も、また永遠に変わることはない方」（ヘブライ13・8）であり、教会共同体が「沖に漕ぎ出して網を降ろし」、希望を抱いて新たな千年期へ向かうようにと促しておられます。新しい千年期は、冒険のための広大な大海のように私たちの前に広がっています。（「新千年期の

初めに」58参照）

大聖年を通して受けた多大な恵みを、活動のための決断と指針として今こそ実行に移さなければなりません。

3 「沖に漕ぎ出して網を降ろしなさい。」（ルカ5・4）今日もう一度、司教方と教区にこう言います。今は、新たな霊的司牧的熱意を受け入れ易いときです。熱意といっても非現実的なものではなく、大聖年にいただいた深く力強い恵みの体験に基づくものです。

兄弟姉妹の皆さん、不屈の希望の模範である幸いなおとめに目を向けましょう。天使のメッセージを受け、御言葉が人となった後、おとめは急いで年上のいところであるエリザベトの家へ出発しました。エリザベトは助けを必要としていたからです。（ルカ1・39参照）

教会は、大聖年の間に熱心に託身の秘義を思い起こしました。そして、全大陸の人々一人一人にキリストが届くために、今は「沖に漕ぎ出す」ことが求められています。教会はマリアの模範にならい、その助けと取り次ぎに頼っています。一緒にお告げの祈りを唱え、信頼を込めてマリアにお願いしていきましょう。（2001.2.4）

聖母の励まし

〔聖母は時におそってくる自らの限界や失敗を恐れないようにと励ましてくださる。〕

1 兄弟姉妹の皆さん、今日の主日の福音は、イエスがカナの婚宴でなされた奇跡についての箇所です。それは最初の「しるし」で、イエスはその「しるし」によってご自分の栄光を表わし、弟子たちに信仰を注ぎ込まれました。（ヨハネ2・11参照）

福音のこの箇所を黙想すると、終わったばかりの大聖年、教会と世界にとって一つの大きな記念すべ

き「しるし」であった大聖年を思い出します。キリストはカナの婚宴の時と同じように、大聖年には、未熟な靈魂であった「水」を再生と委託という豊かなこくのある「ぶどう酒」に変化させてくださったのでした。今はもう大聖年は幕を閉じ、私たちは日常生活に戻っていますが、以前より熱心に日々の出来事に取り組んでいます。そしてかつてないほど

にしっかりと主を見つめています。このことは使徒書簡「新千年期の初めに」で記した通りです。（1 6 番参照）

2 本日の福音で、水をぶどう酒に変えるという素晴らしい出来事を頼んでいるのはイエスの母マリアです。さらにマリアこそ私たちの願いを取り次いでくださるお方です。このことは、二千年期から三千年期への移行に関しても言えることでした。この変わり目に、聖母の無原罪の御心が多くの子供たちにとって安全な避難所であることが証明されました。こうして教会は新たな春のしるしを体験することができましたが、これは第二バチカン公会議から始まっていたのです。「紀元二千年の大聖年の広い意味での準備は、第二バチカン公会議によって実際に始まりました。」（「紀元2000年の到来」20）

聖年は多くの人の心を開いて希望に向かわせ、キリストの光で世の中の道を照らしました。

3 キリストの母はカナの婚宴で召使いたちに勧めた

言葉を、今度は、新しい千年期に勇敢に立ち向かう私たちに繰り返します。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください。」（ヨハネ2・5）この言葉によって、聖母が私たちを励まそうとしていたということがよくわかります。個人的、あるいは家庭に、教会や国家のレベルで、時として体験する限界や失敗を恐れないようにと励ましてください。罪は自分自身や人々に対する信頼を傷つけますが、マリアはその罪さえも恐れないようにと促しています。大切なのは、キリストを信頼し、キリストがおっしゃることは何でも行うことです。キリストが私たちの絶え間ない祈りに耳を傾けないままでいることなどありえません。

今日福音が繰り返した聖母の招きによって、私たちが心を開き自分自身をまったくイエスに委ねることができるようになります。聖母の言葉は、神の御子の勇気を与える言葉を反映しています。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（マタイ28・20）

(2001.1.14)

使徒書簡「新千年期の初めに」抜粋

(3月号付録の続き)

日曜日の聖体祭儀

35 (ですから) はっきりしていることは、私たちは主に典礼に注意を向けなければならないということです。典礼は「教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。」

(「典礼憲章」10) 二十世紀において、特に公会議以来、キリスト教共同体の秘跡、中でも聖体の祝い方は大きく発展しました。この方向で続けること、また特に日曜日の聖体祭儀と日曜日自体を強調することが必要です。日曜日は信仰の特別な日、つまり復活した主と聖霊の賜物の日、毎週やって来る本物の復活祭（「主の日」1 9 参照）なのです。二千年間、キリスト教の時間は「週の初めの日」（マルコ16・2、9、ルカ24・1、ヨハネ20・1）の記憶によって測られてきました。この「週の初めの日」に復活したキリストは使徒たちに平和と聖霊の賜物をお与えになりました。（ヨハネ20・19～23参照）キリストの復活という真理は、キリスト教の信仰のもととなる事実です。（1コリント15・14）キリストの復活は時の神秘の中心に位置する出来事で、キリストが栄光に包まれて戻られる世の終わりの日をあらかじめ示したものです。新しい千年期に何が待ち構えているのか私たちにはわかりません。けれども確かなことは、「王の王、主の主」（黙示録12・32）であ

るキリストの手の中にいけば安全だということです。そして、キリストの過ぎ越しを年に一度だけでなく毎日曜日祝うことで、確実に教会はあらゆる世代の人々に「歴史を支える真の軸を示そうとしています。世界の始まりとその最終的な運命の秘義は、そこに通じているのです。」（同上2）

36 使徒書簡「主の日」にしたがって主張したいことは、聖体を分かち合うことが、洗礼を受けたすべての人にとって、本当に「日曜日の中心的出来事」となるようにということです。基本的な義務は、単に教えを守るために行われるのではなく、真に知恵のある筋の通ったキリスト者の生活に本質的なものとして感じることです。私たちは新しい千年期に入っています。この千年期は、すでにその兆しはありますが、様々な文化や宗教が混ざり合うという特徴を持つことになるでしょう。それは何世紀もキリスト教である国においても例外ではありません。多くの場所で、キリスト者は「小さな群れ」（ルカ12・32）であり、またそうなりつつあります。このことはキリスト者にとって挑戦を意味します。しばしば孤立した困難な状況で、キリスト教的考え方と異なる要素に対してキリスト者とは何であるかをしっかりと証しするという挑戦です。毎週日曜日に聖体にあずかるという義務もその一つです。日曜日

の聖体祭儀というのは、毎週キリスト者が神の家族としてみことばと命のパンの食卓に集まる時ですが、分離を防ぐための最も自然な方法でもあります。そこは特権的に、一致が絶え間なく宣べられ育まれる場です。聖体祭儀における分かち合いを通して、明らかに、主の日はまた教会の日となります。その時、教会は一致の秘跡として効果的に自らの役割を果たすことができるのです。

和解の秘跡

37 更なる司牧的な勇気も求めています。キリスト教共同体の日々の教えが、説得力をもって効果的に和解の秘跡の実行を保証することです。皆さんも思い出すことでしょう。1984年、世界代表司教会議後の勧告「和解と悔悛」で、私はこの問題を扱っていました。これは、この問題に専念した司教会議議会の結果をまとめたものです。私の招きは、今日の文化に見られる「罪の感覚」(n.18;AAS77(1985),224参照)の危機に直面する努力を払うことでした。更に、孝愛の神秘としてキリストを再発見するよう強く主張しました。キリストにおいて神はその哀れみ深い心をお示しになり、キリストによって私たちと完全に和解なさいました。悔悛の秘跡を通して再発見しなければならないものこそキリストの御顔です。信じる人にとって悔悛の秘跡は「洗礼の後に犯した重大な罪の赦しを得る普通の方法です。」(同上31)司教会議がこの問題に触れたとき、和解の秘跡の危機は誰の目にも明らかであり、世界のいくつかの場所においては特にそうでした。危機の原因はその時からの短い間にはまだ消えていません。しかし、大聖年は特に悔悛の秘跡へ立ち戻るといった特徴を持っていました。そして、私たちに勇気をもたらすメッセージを与えてくれたことを無視すべきではありません。多くの人々、大勢の若い人たちがこの秘跡に近づくことで恩恵を受けたのなら、おそらく必要なことは、この秘跡を示し、司牧者自身が信頼と創造性、忍耐をもって、この秘跡の大切さを認めるよう導くことでしょう。司祭職に携わる兄弟の皆さん、危機に屈してはなりません。神の賜物、中でも秘跡は最も貴重なものであり人間の心を良く知る歴史の主であるお方から来るものだからです。

恩恵の卓越性

38 待ち受ける計画の中で、もっと自信をもって個人的共同的祈りを大切にすれば、生活に対するキリスト教的見方の本質的な原理、「恩恵の卓越」に気が付くことでしょう。霊的旅路、司牧的役務を絶えず襲ってくる誘惑があります。それは、私たちの行動や計画を立てるといった能力によって結果が決まると考えることです。神が私たちにその恩恵に協

力するよう求めているのは本当です。それゆえ、知恵や力の全てを御国のために役立てるよう招いておられます。しかし「わたし(キリスト)を離れては、あなたがたは何もできない」(ヨハネ15・5参照)ということをお忘れしては致命的です。

祈りこそ私たちをこの真理に根づかせるものです。祈りは絶えずキリストの卓越を思い出させ、またキリストとの一致において、内的生活と聖性の卓越を思い起こさせてくれます。この原理が尊重されないなら、司牧計画が無駄になったり、希望を失って欲求不満に陥ってもなんの不思議があるでしょうか。その時私たちは、福音書の奇跡の大漁の話における弟子たちの体験を分かち合います。「わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。」(ルカ5・5)これこそ信仰、祈り、神との対話の時です。恩恵の流れに心を開くため、そしてキリストの御言葉が完全に私たちの中を通り抜けるための瞬間なのです。「沖に漕ぎ出しなさい。」この時、信仰の言葉を語ったのはペトロでした。「お言葉ですから、網を降ろしてみましよう。」(同上)この千年期の始まりに、ペトロの後継者が全教会に信仰の行為に招くことを許してください。信仰の行為とは新たに祈りに励むことです。

御言葉に耳を傾ける

39 神の御言葉に対して改めて耳を傾けなければ、この聖性と祈りの卓越を感じ取ることができないのは確かです。第二バチカン公会議以来ずっと、教会の生命における神の御言葉の卓越した役割を強調したので、聖書に熱心に耳を傾けること、また聖書の注意深い研究が大きく進歩しました。聖書は教会の公的な祈りの中で、重要な位置を占めています。個人や共同体は今や聖書を広く用いており、信徒の中でも神学・聖書学研究の価値ある助けを受けて聖書を深く読む人がたくさんいます。しかしとりわけ神の御言葉に対する関心から新しい生活を引きだしているのは、福音宣教とカトリック要理です。兄弟姉妹の皆さん、この発展は強化され深められる必要があります。それはまた各家庭に聖書があると確認されることで実現します。特に重要なことは、生涯をかけて神の御言葉に耳を傾けるということです。古代においてもまた絶えず有益な聖書朗読の伝統は、私たちの生活に問いかけ、勧めを与え、形作る御言葉を聖書から引き出します。

御言葉を述べ伝える

40 福音化において「御言葉の奉仕者」になるために御言葉を榮譽として自己を強めること。これは確かに、新しい千年期を迎える教会にとっての最優先事項です。何世紀も前に福音化された国々において

も、「キリスト教社会」はもう無くなっています。キリスト教社会とは、人間の生活につきまとうもろさに囲まれながらも、福音の価値が基準とされる社会でした。今日ますます多様化し厳しくなっている状況に勇敢に直面しなければなりません。今日の状況は、「グローバルゼーション」や、結果として起こった新しい民族や文化の不確かな混ざり合いに関連して起こっています。私は何年も新しい福音化への呼びかけをたびたび繰り返して来ました。今ももう一度繰り返します。特に次のことを主張するために繰り返します。自分自身をもう一度最初の熱意でかき立て、聖霊降臨後の使徒の説教の熱意を、自己の中にあふれさせなければならぬのです。パウロの燃えるような確信で自分自身が生き返らなければなりません。パウロはつぎのように叫びました。「福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。」(1コリント9・16)

この情熱は必ず教会内で新しい使命感を呼び起こすことができるでしょう。その使命は「専門家」だけに委ねられてはならず、すべての神の民の責任に関わるべきものです。キリストと本物の親しさを得た人々は、キリストを自分の中だけに留めるのではなく、宣べ伝えなければならぬのです。更なる使徒職の広がりが必要とされています。それはキリスト教共同体やグループの毎日の義務として実践されるでしょう。しかしながら、使徒職は様々な人々がそれぞれの方法で成すものですから、文化的多様性に対しては、尊敬と思いやりの心をもって接しなければなりません。多様な文化の中にキリスト教のメッセージを植え付ける時には、たとえば次のような配慮が必要です。つまり、さらなる完全さを目指す際に、各民族の価値を拒絶することなく清めていくということです。

第三千年期において、キリスト教は文化の福音化(インカルチュレーション)の必要性に対してさらに効果的に応える必要があるでしょう。キリスト教は、自分自身に真実であり、福音宣言と教会の伝承の宣言に対する確固とした忠実を保つ一方で、キリスト教が受け入れられ根づいている文化や人々の様々な面も反映するはずで、この大聖年には、教会の様々な側面の美しさを見て喜びました。このことは単なる始まりで、神の霊が私たちのために用意してくださっている未来のイメージの下書きに過ぎないのかもしれませんが。

キリストは人々に自信をもって示されるべきです。大人、家庭、若者、子供に、福音書のメッセージの最も革新的な要求を隠さずに述べ伝えましょう。ただし、それぞれの感受性や言語の必要性を考慮に入れて、次のように宣言したパウロの模範に倣いましょう。「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。」(1コリント9・22)このように勧めるとき、若い人々への司牧的配慮を特に考えています。前にも述べましたが、若い人々に関しては本当に、若者の豊かな可能性という励みになる証拠が大聖年にもたらされました。私たちはこの勇気を与える若者たちの反応を、新しいタレント(マタイ25・15参照)として受け入れ、実を結ばせなければなりません。新しいタレントは、豊かな実りをもたらすようにと主が私たちの手にお委ねになったものだからです。

41 大聖年の間に示された信仰に対するたくさんの証言の輝かしい模範が、大胆で積極的、創造的な使命感において私たちを支え導いてくれますように。教会にとって殉教者は常に命の種子です。「殉教者の血は信者の種」(Tertullian, Apologeticum, 50, 13.PL.1,534) テルトゥリアヌスのこの有名な「法則」は歴史のあらゆる試みの中で証明されました。これは、今始まる世紀や千年期にとっても同じではないでしょうか。私たちは殉教者を遠い存在として考えるようになっていくかもしれません。殉教者はあたかも昔の、特に初代キリスト教時代の存在のように考えているのではないのでしょうか。大聖年の思い出が示すことは、驚くべき光景です。大聖年は、現代にもたくさんの証人がいることを教えてくれました。現代の証人たちは敵意や迫害の真只中で様々な方法で福音を生きることができた人々です。その中の多くの証人は自らの血を流すというこの上ない試みにまで遭いました。殉教者の中で、神の御言葉は良い土地にまかれ百倍の実を結んだのでした。(マタイ13・8, 23参照) 殉教者は良い模範を示し、私たちがいわば未来への道を順調に進めるようにしてくれました。私たちに残されたのは、神の恩恵と共に殉教者の道に続くことなのです。

(この文書の全訳は

カトリック新聞に掲載される予定です。)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人 ■精道教育促進協会 〒659-0093兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-34-5920

FAX. 0797-34-4920 振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会

* 電話受付時間は月・火曜日午前9:30~11:30、水曜日午後2:00~午後5:00、

木曜日午後1:30~5:00となっています。